新潟日報
2020年（令和2年）
11月7日
土曜日

薫る夢に酔いしれて

沖電気工業有志「挑」と命名

情報通信大手の沖電気工業（東京）のプロジェクトチームが、佐渡市西三川の廃校を利用した「学校蔵」で仕込んだオリジナル純米大吟醸酒が完成した。変革の精神や酒造りへのチャレンジという思いを込めた酒は「挑（いどみ）」と命名。瓶にはトキのイラストを刷ったラベルを貼り、同社の顧客らに佐渡の味を届ける。

学校蔵仕込みの酒が完成

沖電気工業が初めて造った日本酒「挑」を試飲する宮沢透常務執行役員（右）＝佐渡市西三川

学校蔵は尾畑酒造（真野新町）が廃校を再生した酒蔵で、2014年から酒造りをしている。沖電気は昨年、ユーザーとの交流会で学校蔵を訪問した。その際、「学校蔵から佐渡と日本酒の未来に夢を」という地域貢献の姿勢に共感。社内で有志を募り、酒造りのプロジェクトを発足させた。

6月にはプロジェクトの16人のうち9人が佐渡を訪問し、最長で1週間泊まり込んだ。「どうせならいい酒を」（東日本営業本部の横山徹新潟支店長）と、繊細な温度管理が求められる純米大吟醸に挑戦し、佐渡産酒米700キロを使って仕込んだ。4合瓶2190本分の酒が完成した。

お披露目の10月30日は、プロジェクトオーナーの宮沢透常務執行役員が学校蔵で「挑」を試飲し、「本当においしい」と顔をほころばせた。

宮沢常務は「来年創業140年を迎える当社にとって、新たなチャレンジとなった。酒造りでの数値的なマネジメントに学ぶことも多かった」と振り返った。

尾畑酒造の尾畑留美子専務は「水や米に触れ、田んぼを訪ねる中で、佐渡の酒や農業を知ってもらえたのではないか」と感謝した。